

第27回 フィジカルヘルスフォーラム



2026年3月18日(水)、19日(木)
立命館大学 びわこ・くさつキャンパス
ローム記念館4階 大会議室

主催 フィジカルヘルス研究会
共催 一般社団法人 国立大学保健管理施設協議会
立命館大学 保健センター
滋賀県医師会
後援 公益社団法人 全国大学保健管理協会

フィジカルヘルス研究会

第27回フィジカルヘルスフォーラム

産業保健の一次予防と三次予防の視点から教職員の Well-being を追求する

第1日目 2026年3月18日(水)

13:00~13:15

開会式

開会の辞：中川 克 (立命館大学 保健センター)

開会挨拶：伊坂 忠夫 (立命館大学 スポーツ健康科学部)

13:15~14:15

特別講演

Well-Being の実現に向けて立命館が展開する身体圏研究

演者 伊坂 忠夫 (立命館大学 スポーツ健康科学部)

座長 中川 克 (立命館大学 保健センター)

14:15~15:00

施設見学 CVIC 見学・体験

15:00~15:15

休憩

15:15~18:00

シンポジウム (一次予防の視点から)

Well-being を目指したスポーツ健康科学をどう産業保健につなげるか?

座長 小林 大介 (立命館大学 保健センター)

<各講演 25分 + 質疑 10分>

15:15~

講演1 効率的な筋量増加におけた栄養摂取と運動

藤田 聡 (立命館大学 スポーツ健康科学部)

15:50~

健康バンド体操

16:05~

講演2 働き世代から高齢者までの健康づくり

家光 素行 (立命館大学 スポーツ健康科学部)

第1日目の続き

- 16:40～ 講演3 職場環境からメンタルヘルスを整える1次予防
山浦 一保 (立命館大学 スポーツ健康科学部)
- 17:15～ パネルディスカッション
- 17:55～ まとめ

第2日目 2026年3月19日(木)

- 9:30～11:30 **フォーラム (三次予防の視点から)**
復職支援の課題：リワークの導入について考える
座長 鷺見 長久 (立命館大学 保健センター)
- 9:30～ 医療リワーク：よりよく働くための医療リワーク
阿部 能成 (杉本医院からすまメンタルクリニック・副院長)
- 10:20～ 公的リワーク：障害者職業センターにおける復職支援について
倉石 百合子 (滋賀障害者職業センター・障害者職業カウンセラー)
- 11:10～ 質疑
- 11:30～11:45 休憩
- 11:45～12:45 **ランチョンセミナー**
白川静の漢字の世界～身体と漢字
演者 後藤 文男 (立命館大学 白川静記念東洋文字文化研究所)
座長 三沢 あき子 (立命館大学 保健センター)
- 12:45～13:00 **閉会式**
次回世話人挨拶：佐藤 研 (弘前大学 保健管理センター)
閉会の辞：石黒 洋 (フィジカルヘルス研究会 代表世話人)

Well-Being の実現に向けて立命館が展開する身体圏研究

伊坂 忠夫

立命館大学スポーツ健康科学部、立命館大学スポーツ健康科学総合研究所

ここからの新しい社会として、Society 5.0 が提唱されている。これは「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する新たな未来社会」と定義され、その実現に向けたこの間の技術革新、ならびに情報システムの発展はめざましく日常生活ならびに社会システムに大きな変革をもたらしてきている。

一方で、我々の身体は、常に、外部環境や刺激により影響を受けており、身体の健康を維持・増進させるために、「睡眠、栄養、運動」が重要であることはよく知られている。さらに、外部環境はリアル環境だけでなく、サイバー空間（仮想空間、メタバース空間）による影響についても今後の身体研究における重要なテーマとなる。加えて、コミュニティや社会集団の中でのやりとり（バーチャル環境も含む）において、我々の身体がどのように反応し、影響を受けるのか、そしてその影響をポジティブにしていくには何が必要なのか、については未解明な部分が多い。

以上のことを踏まえ、我々は身体に関わるマルチスケール（マイクロからマクロレベル）で、身体が影響をうける外部環境（睡眠、栄養、運動、集団、社会など）の影響を明らかにすることによって、健康長寿の実現、QOL の向上、そして well-being につなげる社会実装までを目指す新たな研究領域「身体圏研究」を進めている。

幸いなことに、2023 年度「地域中核・特色ある研究大学の連携による産学官連携・共同研究の施設整備事業」ならびに、2024 年度「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」の採択を受けて、身体圏研究領域を推進する実験環境の開発・設置、新しいセンシング技術・センサーの開発・設置ができるようになり、基本的な研究環境を整備することができるようになっている。

このような研究環境を活用し、Well-being の実現に向けて、長期にわたるビックデータの蓄積と活用（過去履歴と現在の情報からの未来の予測とアドバイス）、MCI（軽度認知症）予防、個人に最適化した生活スタイルの提案なども可能になるであろう。ただし、客観指標となるデータをどのような基準（ガイドライン）で計測するのか、ならびにシステムも含めた標準化はどうするのか。加えて、個人情報保護といった法的、倫理的な観点からの検討は必要不可欠であり、総合知を活用した学際共創研究として生み出されるシーズ、技術、成果については十分な議論が必要になる。

これから急速にテクノロジーが進み、社会システムが変化する時代に突入しているからこそ、より深く「身体」と身体にまつわる、「身体圏」という観点からの発想と研究の進展とその成果の社会実装がより重要性を増すと考えている。J-PEAKS（立命館大学拠点）にて進めている、これからの Well-being の実現に向けた身体圏研究の取り組みについてご報告させて頂き、産業保健、学校保健の関係者のみなさまと活発な議論を展開したいと願っております。

【略 歴】

立命館大学副学長、スポーツ健康科学総合研究所所長、スポーツ健康科学部教授。博士（工学）。専門は応用バイオニクス。「動く」身体のマカニズムを科学的に解明し、ハイパフォーマンスとハイアクティブの実現を目指している。

日本バイオメカニクス学会会長、日本体育・スポーツ・健康学会副会長、大学スポーツコンソーシアム KANSAI 会長、大学スポーツ協会執行理事。

効率的な筋量増加にむけた栄養摂取と運動

藤田 聡

立命館大学スポーツ健康科学部

骨格筋は日常生活における全ての動作に欠かせないだけでなく、糖・脂質やアミノ酸代謝を制御する重要な組織である。サルコペニアは転倒による骨折の危険性のみならず、筋量低下によるインスリン抵抗性や心疾患の発症リスク増加も指摘されており、特に高齢期における機能的自立を妨げる深刻な要因である。

食事を摂取すると筋たんぱく質の合成速度は安静時と比較して約 2 倍に増加する。この食事による筋たんぱく質の同化作用は主に必須アミノ酸による作用であり、特に分岐鎖アミノ酸のロイシンが骨格筋細胞に直接働きかけ、たんぱく同化作用のトリガーとして働くことが明らかとなっている。高齢者を対象とした追跡調査において、1 日の総たんぱく質摂取量は高齢者の 3 年間における除脂肪体重の減少と負の相関を示すことが示されており、食生活におけるたんぱく質摂取の重要性が指摘されている。さらに、近年の研究では、1 日の総摂取量が充足していても、各食事でのたんぱく質が 1 食でも不足すると、筋量低下のリスクを増加することが報告されている。

日常生活で取り組めるサルコペニア対策として、運動介入は最も手軽でかつ効果的である。単回のレジスタンス運動は筋たんぱく質の合成を急激に増加し、その同化作用は運動後において約 2 日間持続する。またレジスタンス運動をトレーニングとして繰り返し、長期的に継続することで、虚弱な高齢者でも筋量を増加させ、筋機能を改善することが可能である。運動による筋肥大効果を最大限に高める観点からは、レジスタンス運動と組み合わせるアミノ酸/たんぱく質などをサプリメントとして摂取する介入試験がこれまで多く検証されてきた。運動の実施前あるいは実施後のサプリメント摂取は、筋たんぱく質の合成速度を運動のみの実施と比較して有意に高め、長期の介入研究では、より高い骨格筋量の増加を引き起こすことが報告されている。さらに、食事からのたんぱく質摂取に関わり、長期的なトレーニングの実施に伴う骨格筋量の増加が、朝食でのたんぱく質摂取量の影響を強く受けることが明らかとなっている。

本講演では、骨格筋のたんぱく質代謝に対する栄養摂取と運動の効果を検討したエビデンスを紹介し、それらの知見に基づいた臨床現場での応用について議論する。

【略 歴】

2002 年南カリフォルニア大学大学院博士号修了。博士(運動生理学)。2006 年テキサス大学医学部内科講師、2007 年東京大学大学院新領域創成科学研究科特任助教を経て、2009 年より立命館大学。米国生理学会 (APS) や米国栄養学会 (ASN) より学会賞を受賞。監修本に『間違いだらけのたんぱく質の摂り方』、共著に『体育・スポーツ指導者と学生のためのスポーツ栄養学』など。2021 年に長年の研究に基づき企業の健康経営をサポートする (株) OnMotion を設立。

働き世代から高齢者までの健康づくり

家光 素行

立命館大学 スポーツ健康科学部

現在、国内の年間死亡原因の約 21%が動脈硬化性心血管疾患（死因第 2 位：心疾患および第 4 位：脳血管疾患）によるものである。その背景には、肥満、高血圧、脂質異常症、糖尿病といったメタボリックシンドロームが深く関係しており、これらが動脈血管の機能低下を引き起こし、結果として動脈硬化性病変の進展および心血管イベント発症リスクの増大につながっている。特に、高血圧、脂質異常症、糖尿病の罹患率は 40 歳代から急増することが知られており、働き世代からの生活習慣改善と予防的介入の重要性が指摘されている。また、「血管は年とともに老いる」といわれるように、40 歳代以降は加齢に伴い動脈硬化性心血管疾患の発症リスクが上昇する。高齢化社会を迎えた現在、国民医療費（約 46.7 兆円）の約 12%が動脈硬化性心血管疾患に関連しており、医療財政を圧迫する要因の 1 つとなっている。したがって、動脈硬化性心血管疾患の予防・改善は、働き世代から高齢者までを対象とした健康づくりの重要課題であるといえる。

これまでの研究から、30～60 分程度の継続的な有酸素性運動（ジョギングや自転車運動など）を週 3 回以上、習慣的に実施することで、動脈機能を亢進・改善し、動脈血管の拡張作用を高めることにより、動脈硬化に対して有益な効果をもたらすことが明らかとなっている。また、有酸素性運動に限らず、日常生活の中で行っている身体活動（生活活動）として 1 日 8,000 歩を目標に歩くことでも、動脈硬化度の低下が期待できることが報告されている。このような身体活動による動脈硬化改善のメカニズムの 1 つとして、血流の増加に伴い動脈血管の内皮細胞から分泌される一酸化窒素 (NO) などの血管拡張物質が関与していることが明らかとなっている。

本発表では、身体活動が動脈硬化に及ぼす影響とその効果機序に関してこれまでの研究知見を紹介する。さらに近年では、有酸素性運動を用いたトレーニングだけでなく、低強度レジスタンス運動やストレッチ運動など、さまざまな運動様式が動脈硬化リスクに及ぼす有用性が明らかになっている。そこで本発表では、働き世代から高齢者まで、それぞれのライフスタイルに合わせて導入できる運動実践法とその効果について紹介したい。

【略 歴】

2003 年 3 月 筑波大学大学院 医学研究科 博士課程 修了（博士：医学）

2004 年 4 月 筑波大学大学院 人間総合科学研究科（体育科学系）助手

2007 年 4 月-現在 国立健康・栄養研究所 健康増進プログラム 客員研究員

2010 年 4 月 立命館大学 スポーツ健康科学部 准教授

2014 年-現在 立命館大学 スポーツ健康科学部 教授

職場環境からメンタルヘルスを整える 1 次予防

山浦 一保

立命館大学スポーツ健康科学部

人は、人との関わりのなかで磨かれて成長し、幸せを享受します。その証拠のひとつ、1938年から何世代にもわたる調査を行ったハーバードのグラント研究は広く知られており、私たちの幸福と健康を高めてくれるのは「良い人間関係」であると結論づけています。

確かに、頼れるだれか一人でもいてくれれば、それで私たちは生きていけます。苦境に立たされているときでも、病に伏しているときでも、だれかが傍にいてくれるだけで耐えることができます。しかしながら、日々の生活では、人との関わりがあるから悩みが生まれ、苦しみを増すことがあります。いったい、人との関わりとは何なのでしょう。そして、どうすれば、私たち自身や組織・チームが望む“より良い”関わりを創っていくことができるのでしょうか。それを考えている分野の一つが、組織心理学/社会心理学です。当日は、この心理学の視点から、実践に向かうための「職場の人間関係」構築に関する具体的な予防・対処法について、データを示しながら皆さんと一緒に改めて考えてみたいと思います。

1. 人間関係のチカラ

人間関係という見えない力学は、ときとして個人の精神的な健康を蝕みます。また、比較的最近の研究では、二型糖尿病などの身体に及ぼす長期的な影響も報告されています (Xu et al., 2022)。加えて、望ましくない人間関係やメンタル上の問題事象は、組織の経済を大規模に揺るがします。悪態をつく上司に関わる損失は年間 317 億ドル (Hassard et al., 2018)、メンタルヘルス関連のプレゼンティイズムによる損失は 400 億ドル超 (欠勤による損失を合わせて日本の GDP1.1%相当) などと試算されています。

思想家ボブ・プロクターは、“あなたの身体の中には、あなたの住む街を一週間照らすのに十分なだけの潜在的な能力があります。”と言います。人がもつこれほどの潜在力を引き出せるように、またそれを可能にする組織環境づくりが求められます。

2. メンタルヘルスを整える「予防策」

組織における人間関係の営みは、目標に向かって“個々人がもっている熱 (影響力)”を伝え合うプロセスです。これがリーダーシップです。つまり、リーダーシップは、(影響力の大小はあっても) メンバー全員のもので、例えば、信頼崩壊という致命的な状態に陥る第一の原因は、ネガティブな言動、すなわちリーダーシップの失敗によるものです。効果的なリーダーシップ行動の基軸は、課題志向と関係志向の 2 つです。これらが伝わり合うことで、相互信頼、貢献、好意にもとづく対人関係や組織を育むことが可能になります。

3. メンタルヘルスを整える「事後対処」

どんなに尽くしても、あるいは尽くしているからこそ、人との関わりの中ではネガティブな感情を経験するものです。この不快な対人的感情とのつき合いは難しい課題のひとつですが、効果的に対処しなければ他者への協力を抑制し、組織に破壊的な影響を及ぼします。この対処法について、最近の研究で明らかになってきているいくつかを紹介します。

【略 歴】

福岡県生まれ。立命館大学スポーツ健康科学部教授 (産業・組織心理学)。博士 (学術：広島大学)。(財) 集団力学研究所主任研究員、中央労働災害防止協会調査研究部リサーチ・レジデント、静岡県立大学経営情報学部講師、立命館大学スポーツ健康科学部准教授を経て、2016 年より現職。

よりよく働くための医療リワーク

阿部 能成

杉本医院からすまメンタルクリニック、京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学、慶應義塾大学医学部医科学研究連携推進センター

1997年に秋山らがりワークプログラムを開始してから、医療リワークは日本独自の治療として保険診療の体制の中で進化を遂げてきた。2005年から全国の障害者職業センターで労働保険を原資にしたリワークが提供されるようになり（職リハリワーク）、企業による試し出勤・ならし勤務など職場リワークも広まっている。法改正によって2023年4月から一般就労中の障害者でも障害福祉サービスでリワークが利用できるようになった（福祉リワーク）。リワークによる再休職予防の有効性が報告されているが、医療リワークを提供している施設を対象にした調査では休職の期間は平均13.5か月であり、そのうちリワークプログラムを利用した期間は平均6か月であった。日本の景気が低迷する中で中小企業の倒産件数、休廃業件数は増加傾向が続いており、休職者を抱える余力のない規模の小さい事業所では休職期間での雇用保障期間の上限を短縮化する傾向があり、6か月未満であることも多い。貴重な日本の労働生産人口を支えるために、スムーズなリワークの導入とリワークの効率化・短縮化が社会から精神医療へ求められている。一方で、職場に適応しにくい方の病状には神経発達症特性やパーソナリティの特徴、外傷体験が影響していることも多く、これらを包括的に取り扱うためには一定期間を要する。

うつ病などの精神疾患は、遺伝子～神経ネットワークの各階層における効果量の小さな変異の集積と、生育歴やライフイベントなどの環境要因が生涯にわたり相互作用することで形成される。患者が複数の精神疾患を行き来することも、併存することも多い。症状評価尺度（HAM-D、MADRS等）上の寛解が得られても、それだけで就労機能の回復や安定した復職には直結せず、「復職準備性」と個別の課題を別個に評価・高める支援が不可欠である。本講演では、まず精神疾患の成り立ちを概説し、精神科医が個人要因と環境要因を統合して見立て・治療方針を構築するプロセスを整理する。ついで、本邦で独自の発展を遂げてきた医療リワークを紹介し、職場リワーク、職業リハリワーク、福祉リワークの役割と長所・限界を対比する。当院ショートケア「リワークからすま」における取り組みとして、復職準備性（通勤の安定、勤務継続、注意・集中機能、睡眠覚醒リズムなど）の評価と向上、個別担当制のもとでの個人精神療法と集団精神療法の併用、集団の中で露わになる認知的・対人関係的特性の観察と介入の実際を症例提示とともに紹介する。回復するだけではなく、「これまでよりもよりよく働く」ことを目標とした復職支援のあり方を考察する。

【略歴】

2010年3月京都府立医科大学医学部医学科卒業
2010年4月名古屋大学医学部附属病院 初期臨床研修医
2012年4月京都府立医科大学精神医学教室入局
2013年4月京都府立医科大学大学院医学研究科 精神機能病態学 入学
2017年3月京都府立医科大学大学院医学研究科 精神機能病態学 卒業
2017年4月京都府立医科大学大学院医学研究科 精神機能病態学 助教
/京都府立医科大学附属病院精神科・心療内科 病棟医長（副）
2020年4月京都府立医科大学大学院医学研究科 精神機能病態学 助教
/京都府立医科大学附属病院精神科・心療内科 病棟医長・診療科長（副）
2022年4月京都府立医科大学大学院医学研究科 精神機能病態学 助教
/京都府立医科大学附属病院精神科・心療内科 外来医長（副）・診療科長（副）
2023年4月杉本医院からすまメンタルクリニック 副院長
/京都府立医科大学大学院医学研究科 精神機能病態学 客員講師
2025年7月慶應義塾大学医学部医科学研究連携推進センター 研究員（非常勤）

障害者職業センターにおける復職支援について

倉石 百合子
滋賀障害者職業センター

近年、メンタルヘルス不調による休職者は増加傾向にあり、厚生労働省「労働安全衛生調査」(令和6年調査)によると、過去1年間にメンタルヘルス不調で連続1か月以上休業した労働者がいた事業所の割合は10.2%、退職者がいた事業所は6.2%に上っている。労働力人口が減少していく中、人材確保・生産性維持の面からも企業にとって休職者の復職支援や再休職防止は重要な課題と言える。厚生労働省は「心の健康問題により休業した労働者の職場復帰支援の手引き」において、円滑な職場復帰及び職場復帰後の再休職を予防するために有効な手段として事業場外資源の利用を推奨している。

事業場外資源の1つである地域障害者職業センターのリワーク支援は、障害者の雇用の促進等に関する法律に基づいて実施されており、公的リワークとして位置づけられている。職業リハビリテーションの一環として、職場復帰に向けた課題整理や職場との調整を重視しており、①支援開始までのコーディネートにおいて本人・事業所・主治医の三者同意形成を図っている点、②本支援プログラムにおいて仕事に模した作業課題を設定している点、③復職の際に必要な応じてジョブコーチによる職場適応支援に連動できる点は地域障害者職業センターで行われるリワーク支援の特色と思われる。また実施プログラムは、障害者職業総合センターが開発・体系化した研究成果に基づき、全国で均質なサービスを提供しており、利用者ニーズに応じた支援技法の改良が継続的に行われている。

本発表では、以下について話題提供を行い、地域障害者職業センターの復職支援について知っていただき、利用検討の契機となることを期待したい。

1. 障害者職業センターの業務について

- 障害対象者への支援
- 事業主への支援
- 関係機関への支援

2. 滋賀障害者職業センターリワーク支援の概要紹介

- コーディネート(事前相談、体験通所、三者(本人-事業所-主治医)同意の形成)
- 本支援プログラム(生活習慣・ストレス対処・コミュニケーション・仕事の取り組み方の見直し、再構築)
- 報告会(休職に至った要因分析、再発防止策等の検討、復帰に向けた調整)

3. 事例紹介

- 典型的なリワーク利用モデルケース
- 発達障害特性の理解を深め企業へ障害開示・ジョブコーチを利用して復職したケース
- 高次脳機能障害により職務変更して復職に至ったケース

参考文献

- 厚生労働省「令和6年 労働安全衛生調査(実態調査)結果の概況」
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/r06-46-50b.html>
- 厚生労働省「心の健康問題により休業した労働者の職場復帰支援の手引き」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000055195_00005.html
- 障害者職業総合センター(NIVR)調査研究報告書 No.156「職場復帰支援の実態等に関する調査研究」(2021年4月)
<https://www.nivr.jeed.go.jp/research/report/houkoku/houkoku156.html>

白川静の漢字の世界～身体と漢字

後藤 文男

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所

立命館大学名誉教授の白川静先生は、古代中国で生まれた漢字の成り立ちを研究して、独自の「文字学」を打ち立てた漢字大博士です。その白川先生が打ち立てた古代文字学のもとに、古代中国の人々がどんな思いで漢字を生み出したのか、生まれたての漢字（古代文字）を通してお話しします。

漢字のルーツである「古代文字」が生まれたのは、今から約 3300 年前のことです。その始まりは、人々が生活を通して常にかかわりを持った身近な事物から生み出されました。白川先生は著書の中でこんなふうにご書いておられます。

「ことばは身振り語から起こったといわれるが、文字にも人体の表現が多い。漢字の特徴の一つは、その人体描写の多様さと、それをみごとに形象化した抽象能力にあるということができよう。ト辞（甲骨文字）にみえる人体関係の字は、人の形約四百、大の形約二百、人のひざまずく形約二百、女の形約二百、又（手）に従うもの六百、止（足）の形を持つもの約二百五十、その他子、目、自、耳など合わせて約二百五十、すべて二千を超える。字形約八千のうち、四分の一に及ぶ数であり、文字構成の中心をなすものであることが知られる。」
（『白川静著作集 2』「漢字の世界」P371 より）

人々にとって最も身近だった身体から生まれた漢字がいかに多いか、そして重要だったか、この文章からでもわかります。しかし、その漢字のルーツである古代文字は、3000 年以上も経つうちに、形を大きく変えて現在に至っています。古代中国の人々がどんな思いで一つの漢字を生み出したのか、形を変えた現在の漢字を見るだけでは、わからなくなってしまいました。白川先生は、「古代文字」の成り立ちを研究し、解明する中で、古代文字を通して漢字を学ぶ方法があることに気づかれました。古代文字に戻って漢字を学べば、この漢字はこんな思いで作られたのかと理解しながら覚えることができる、そうすれば、ただ機械的に書いて覚えるだけではない、自分の心に刻むような学び方になると言われました。

今回のランチョンセミナーでは、「身体」から生まれた漢字を中心に、普段なかなかお目にかかれない古代文字を通して、皆さんに漢字を学ぶ面白さをお伝えできればと考えています。皆さんが日常使われている漢字が、意外なルーツを持っていると知れば、漢字が皆さんにとってさらに身近なものとなり、心に残るはずですよ。

【白川静略歴】

1910 年 福井県福井市生まれ。立命館大学（夜間部）卒。文学博士（京都大学）。立命館大学教授・名誉教授。著書に漢字字書『字統』・『字訓』・『字通』（字書三部作）、『漢字』、『孔子伝』、『漢字百話』等がある。著書は多く『白川静著作集』（別巻・続編等を含めると全 35 巻）に収められている。1998 年文化功労者 2004 年文化勲章受賞 2006 年 96 歳没。

【後藤文男略歴】

1952 年 岐阜県生まれ。京都教育大学国文学科卒。立命館中学校高等学校国語科教諭。立命館中学校高等学校校長、立命館小学校校長、一貫教育研究研修センター長、立命館大学大学院教職研究科准教授等を経て、現在、白川静記念東洋文字文化研究所上席研究員。「白川文字学をベースとした漢字教育」の普及に努めている。

大学保健管理センター様の業務を強力サポート!!



CAMPUS

Checkup and Archives Management Platform for University and School

バージョンアップして
一層使いやすくなりました

健診業務や日常の診療など、大学保健管理センター様の業務は手間や時間がかかります。ヘルステック研究所は、大学健診や診療業務の業務負担やコストを減らすお手伝いをしています。

Web 問診システム

国立大学保健管理施設協議会監修

スマートフォンや PC から事前に問診回答。健診当日の確認作業を大幅に軽減できます。手書き問診票の読み取りにくさからも解放されるのでストレスフリーに。問診項目の追加やメンタルヘルス専用の問診レイアウトもカスタマイズにて承ります。

Web 予約システム

電話や手作業での予約管理の手間や時間を大幅に削減！
健康診断やワクチン接種の予約管理が簡単に。
Web 問診システムとセットで導入いただくと、問診から健診予約までの流れがより一層スムーズに行えます。

健診結果閲覧システム 健診ビューワー

学生や教職員が在籍中の健康診断の結果を PC やスマートフォンで手軽に確認できるシステム。異常値と判断された数値は赤字で表示されるので、健康への注意喚起におすすめです。

健康管理システム

学生や教職員の健診結果の管理に加え、保健管理センターにおける日々の診療や面談の内容を記録できる、簡易版の電子カルテのようなシステム。保健センター利用者の月別集計などの機能も付いています。
学内で健診を実施している場合の測定機器との連携にも対応可能です。

オンラインでのご説明も可能です。お気軽にお問い合わせください

 **ヘルステック 研究所**
HealthTech.Lab Inc.
TEL : 03-6416-9963 Mail : info@htech-lab.co.jp

会社名
URL
本社
恵比寿ラボ

株式会社ヘルステック研究所
www.htech-lab.co.jp
〒606-8307 京都市左京区吉田上阿達町17
〒150-0021 東京都渋谷区恵比寿西1-16-8 彰和ビル4階